

緩和ケアに携わる音楽療法士の役割 ー医療現場での多職種協働の観点からー

柴田（小林）麻美（福井県済生会病院）

医療現場では、患者一人一人に対して、医師と看護師、薬剤師、管理栄養士、理学療法士、作業療法士、ソーシャルワーカー、事務員、公認心理師、音楽療法士などの多職種が専門性を活かし、アセスメントを行った上で、治療やケアをおこなっている。

医療には様々な分野があるが、中でも緩和ケアでは患者の全人的苦痛や家族の苦痛、ACPの観点からアセスメントをおこなう場合が多い。その際、多職種による観点から、患者と家族の苦痛や思い・価値観などをとらえる。そして、どこに焦点を当てどのように介入をおこなっていくと、患者や家族の苦悩が和らぎその人らしく過ごせるのか見立てをおこない、治療やケアにつなげていく。同じ患者に対する見立てにも多職種で相違点があり、アプローチの方法も異なる。緩和ケアでは、患者の思いや価値観などに寄り添い、患者や家族の希望や願いを叶えることが重要とされるため、多職種で方向性は共有する必要がある。そして、多職種間でどのようなアプローチをしているかをお互いが理解し、職種ごとの職域や得手不得手を認識し、多職種カンファレンスなどで話し合い、各職種がそれぞれの役割を果たしながら一人の患者に最善を尽くすことが大切であろう。

近年では、緩和ケアの対象はがん患者のみならず、心不全患者、ALS患者、高齢者などへと広がりをを見せており、ますます多職種による関わりが求められてきている。

当講座では、緩和ケア病棟、緩和ケアチームで活動する音楽療法士である筆者が、多職種と協働し患者への治療やケアにどのように携わってきたかという歩みを振り返りながら、音楽療法士だからこそ出来ること・果たせる役割について事例を交えてお話ししたいと思っている。

緩和ケアの臨床実践では、患者（家族）のその人らしさを大切に、希望や願いを叶えることに重きを置く。音楽療法士が患者や家族と同様に、他の職種とも良好な関係・信頼関係を構築した上でケアにあたるということも重要である。そのためには、音楽療法士自身が多職種の役割を理解しコミュニケーションを円滑にとる工夫を意識しておこなっていくことも大切である。多忙な医療現場でときには困難な多職種間のコミュニケーションについて、筆者が意識している視点や工夫について具体例を示しながらお話ししたいと考えている。

聴講される皆様の臨床に役立つヒントを、本講座の中で少しでも見つけていただけたら幸いである。

■プロフィール

広島県生まれ。2000年広島大学教育学部音楽教育学専修卒業、2005年広島大学生物圏科学研究科行動科学講座（実験臨床心理学）博士課程後期修了。博士（学術）。

日本音楽療法学会認定音楽療法士、公認心理師。放送大学非常勤講師。

2007年より福井県済生会病院緩和ケア病棟にて音楽療法士として勤務。2019年より緩和ケアチームの心理職も兼務。現在は、緩和ケア病棟・外来での音楽療法、がん患者やその家族への心理的なケアや子育て中のがん患者とその子どもへのサポートを主におこなっている。